大学における第2外国語としてのスペイン語教育の可能性と限界

—神奈川大学・山本教室の場合—

山　本　純　一

1.　はじめに

毎年4月になると新入生が筆者のスペイン語初級のクラスにもやってくる。最初の2週間はオリエンテーション期間である。筆者としてはこの短い間にスペイン語のおもしろさと有用性を学生諸君に訴え，少しでもスペイン語およびスペイン語文化圏に興味をもってもらいたいと考えている。

しかし，大学の第2外国語は盲腸のようなもので，何の役に立つかわからないと思われている。事実，筆者自身，大学の第2外国語はロシア語であったが，今ではまったく仕事に関係がなく，単語も“ハラショー”と“スパスィーバ”ぐらいしか頭に残っていない。高校から第2外国語としてフランス語を勉強していた筆者は，外国語を勉強するのが好きで，大学に入ったらいろいろな外国語を勉強してみたいと思っていた。ロシア語はむずかしいと聞いていたが，外国語好きだからこそ敢えてそれに挑戦してみたいと思ったのである。しかし，ロシア語の先生の授業は，文法一辺倒で学生にやる気を起こさせるものではなかった。それ以来，専門科目は別として，語学は他大学か語学学校で勉強するようになったのである。皮肉なことに，現在職業としているスペイン語も自分の母校ではひとつも勉強していない。

いろいろな学生の話を聞くかぎり，このような状況は現在もあまり変わっていないようである。それでもなお，大学では第2外国語を学ばなくてはいけないのであろうか。学生にとって大学で英語以外の外国語を学ぶ意味と意義はどこにあるのか。学生諸君は第2外国語を学ぶことを

望んでいるのであろうか……

そんなことを考えながら，筆者は毎年，最初の授業のとき，必ず学生諸君にアンケートをとるようにしている。スペイン語を勉強しようとする動機・目的，授業に対する要望などである。動機についての代表的な答えは，「将来，スペイン（ラテンアメリカ）に旅行したいと思っている」，「スペイン（ラテンアメリカ）の文化・歴史に興味がある」，「アメリカの映画や小説には，よくスペイン語が出てくるので，スペイン語もわかるようになりたいと思った」，「小さいときに父の仕事の関係でスペイン語圏に住んでいたのでスペイン語に親しみがある」，なかには「先輩から発音が簡単で，しかも先生がやさしいので単位が取りやすいと聞いた」と言う本音の回答もある。そして授業に対する要望としては，「高校までの英語のような訳読中心ではなく，会話ができるようになりたい」，「楽しい授業にしてほしい」，「受験英語のような勉強はもうコリゴリ」との声が圧倒的である。

本年度（93年度）より中学の教科書が大幅に改定され，高校の英語教科書も来年度からコミュニケーション重視の方向に変わると聞いている。戦後いくつかあった英語教授法大変革の最新版である。実際，筆者の娘（中３）の英語の教科書（New Horizon）を手に取ると，本のサイズがこれまでよりふたまわりも大きくなり，マンガや写真が多くなったことに気づく。そして内容的にも中１で過去形が出てきたりして，文法項目の配列にも変化が見られる。娘の通う区立中学の授業でも，これまでのパターン・プラクティスといった機械的なドリル練習から，実際のシチュエーションを念頭においたコミュニケーション活動（たとえば友達に英語でインタビューしたり，ペン・フレンドに手紙を書くなど）が多くなっている。このような変化は，現在の語学教育の世界的な潮流となっているコミュニカティヴ・アプローチの影響を受けたものである。

外国語または第２言語（あるいは第３，第４…）をコミュニケーションの手段として捉え，その能力（「聞く」，「話す」，「読む」，「書く」の４技能）を機能的に高めることを目標とするコミュニカティヴ・アプローチは，遅ればせながらスペイン語の世界にも浸透しつつある。昨年１月に清泉女子大学で開催された第３回アジア国際イスパニスタ会議に筆者も参加する機会を得たが，スペイン語教育の分科会ではコミュニカティ

ヴ・アプローチ（método comunicativo）をテーマとした報告が少なくなかった。

語学教育に関してはこれまでいろいろなメソッドやアプローチが喧伝されてきたが，どのような教授法にせよ，それで絶対という方法はなく，ましてや言語を習得する場合には何とかメソッドにこだわっているわけではない。「習うより慣れろ」と言われるように，これまで人類は言葉を使用する必要に迫られて言語を獲得してきたのである。結局のところ，人工的な加工を加えた教授法は自然習得と異なり，どこかに無理が生ずるのであろう。コミュニカティヴ・アプローチも，その理念・手法を深く理解しないかぎり，これまでのメソッドのようにやがては批判にさらされ，捨てられる運命にあるのかもしれないのである。

それでは，筆者自身，どのような理念・手法にもとづいてスペイン語を教えているのかと問われれば，非常勤講師としての身分的制約や第2外国語としての時間的制約はあるものの，目標は，―― 文部省学習指導要領風に表現すると ――「スペイン語を理解し(聞く，読む)，スペイン語で表現する（話す，書く）力を養い，スペイン語で積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度を育てる（学習者の意識変革を図る）とともに，スペイン語やスペイン語圏文化に対する関心を高め，国際理解を深める」ことにあり，教師としてはその手助けをするため，学生とスペイン語との「幸福な出逢い」を演出し，「魅力あるライヴ授業」を提供することを肝に銘じていると答える。以下，実際の事例を見ながら，その「幸福な出逢い」と「魅力あるライヴ授業」を提供することが可能であるかどうか検証してみよう。

2.　事例(1)―初級クラス

週あたり時間数：90分×週2回（ただし，文法中心の授業週1回と会話中心の授業週1回に分かれる。筆者は会話中心の授業を担当）

クラスサイズ　：金曜1限(8：50～10：20)25名(英語英文科12名，法律学科4名，経済学科3名，貿易学科6名)

金曜２限(10：30～12：00)15名（法律学科９名，経済学科１名，貿易学科５名）

会話クラスの目標：基本語彙1,000語程度と基本的な日常会話能力の習得

授業内容（後掲授業時程参照）：

正味80分の授業は各20分ずつの４つの学習項目に分れ，まず挨拶，月日・曜日の確認，雑談など，いつものやりとりを経たうえ，前回の復習をディクテーションおよびその和訳テストという形で行なう。この際，初級クラスといえどもほとんどスペイン語で説明する。授業をスペイン語ですすめることについては，最初大多数の学生が戸惑いを示す。しかし，コミュニケーション能力の向上を目的にするならば，授業を目標言語で行なうのは当然であるし，昨年度初級クラスの学年末テストのアンケート結果でも，授業をスペイン語で行なうことに好意的な者37名（74％）に対し，批判的な者は13名（26％）にすぎなかった。ただ，すべてをスペイン語で説明するのではなく，教室の雰囲気を和らげ（学生の心理的な壁を取り除き），学生の理解を深めるための効果的な日本語の使用は必要であろう。また，学生にはスペイン語で授業を行なうことの目的はインプットの量を増やす（だから知らず知らずのうちに聞き取りができるようになる）ことであり，100％理解できるとは思わないし，また理解する必要もない，大切なのは間違ってもいいから何を言っているかを推測する「語学のカン」を養うことだと説明している。事実，ある生徒は前記テストの際のアンケートで，「このスペイン語の授業は最初から最後までずっとスペイン語だったので，はじめのうち全然わからなくてとまどったけど，文法から入るよりはこうやっていきなり会話に入らされた方が楽しい。毎週耳慣れた単語が増えていって，なんとなくわかるようになるのでこういう授業形式は変えないでほしい」と述べている。

授業時程の最初の３つの学習項目で使用するテキストとビデオは，NHKテレビの『スペイン語会話』である。NHKのテキストとビデオを使用する理由は，第２外国語の初級として学習するのに適当な量であること，また，質的には，ただ単なる会話文ではなく，スペイン語の文化的なコンテクストが映像を通じてよく理解できること，とくに今年度か

らコミュニカティヴ・アプローチを取り入れて番組が大幅に改善されていること（日本語は字幕・文字だけで，説明・進行などの音声面すべてがスペイン語のネイティヴによって語られるインプット主体になっている），番組の内容自体が非常におもしろいこと，宿題としてテレビの視聴を義務づけられること，などである。ビデオの利用に関しては，英語教育についての学生に対するアンケート（英語教育実態調査研究会調べ）でも，10,205名中，6,910名（67.7%）の学生が授業にビデオ・映画などを使用することを望んでいる。

学習項目1（復習）のディクテーションとその和訳は会話文のときもあるし，スペイン語の歌の場合もあるが，必ず10行以上の長さになるように配慮している。ディクテーションは筆者がゆっくり3回繰り返すが，聞き取れなかったり，スペルを間違えた場合には，学生自身が赤ペンで直し，3回練習するように指導している。

学習項目2では，ビデオを見ながら，一時停止を多用し，ターゲット・センテンスの音読練習，文法説明，状況説明，実際の口頭練習や応用を行なっている。その際，なるべく筆者の留学先であったスペインとメキシコ両国のスペイン語の違いや文化的・歴史的背景を話題にするようにしている。

学習項目3は従来型の学習に近いもので，和文西訳が中心である。ただし，いきなり書かせず，まず口で言ってから書くように指導している。そして正しく言えた者を指名して板書させている。その間，筆者はいわゆる机間巡視を行ない，個別に対応している。

学習項目4では，イギリスUSBORNE社の“SPANISH FOR BEGINNERS”を使用して，日常会話の練習を行なっている。これは昨年度から使用しているが，学生に大好評で，その理由を尋ねると，「絵が大きくカラフルで，しかもユーモアに富んでおり，見ているだけで楽しい。日本で出版されているスペイン語の教科書のようにつまらなくない。スペイン語科の学生にも見せびらかして，うらやましがられている」とのことであった。スペイン語のコミュニケーション能力を高めるには，まず学生をスペイン語好きにする必要があり，筆者自身，もっと学習者の立場に立つ授業をこころがけねばと反省をした次第である。

以上のように学習項目を4つに分け，複数の教材を使用している理由

は，コミュニケーション能力の4技能を高め，学習に対する十分な動機づけを行なうには，いろいろな角度から学習する必要があるからで，また，正直なところ，学生を90分間飽きさせないためにも，授業を20分単位ほどに区切った方が有効なのである。

評価方法：

評価は授業への参加度（平常点）と年2回のテストで行なうが，筆者は，テストもコミュニケーション活動の一環であり，安易なテスト作りが学生の意欲を損なうと考えている。したがって，問題作りにも細心の注意を払い，できれば学生が「楽しんでテストに参加できる」ような問題を毎回考えている。一例として，読解力をみるならば，笑い話や実際の機械の説明書を辞書持ち込み可で訳させたり，作文力をみるには，就職試験の面接を想定させ，自己PR文を自由に書くテストなどを行なっている。配点は前期を100点満点(平常点40点，テスト60点＋アルファ)，後期を200点満点（平常点80点，テスト120点＋アルファ），計300点満点としてこれを3で割って学年の成績を出している。後期に倍の比重をかけているのは，前期よりも後期の方が内容がむずかしくなること，前期で失敗しても後期で取り返せるようにする（そして後期もしっかりと勉強してもらう）ためである。

問題点：

文法中心の授業と会話中心の授業を担当する先生が別々のため，その調整を図るのがむずかしくなっている。筆者の場合，今年度は文法担当の先生の御提案により，二人の連絡帳を作り，お互いの授業内容を毎回記録し，必ずそれに目を通した上で授業を行なっているので，昨年度よりもずっとスムーズに授業がすすめられるようになった。

文法クラスと会話クラスの連係以上に大問題なのが，学生の「やる気」である。一般的にいって，文学部の学生が語学好きであるのに対して，他学部の学生は語学が嫌いなようである。その結果が学習態度にも現われている。初級の場合，英語英文科の学生の多い金曜1限目の学生の方が，多人数にもかかわらず2限目に比して意欲的で，テスト結果も良好であった（ちなみに，ほとんど同じテスト問題を出した今年度前期成績

の平均点は，前者の70.6点に対して後者は55.8点であった)。

現在，さまざまな大学で第2外国語の履修条件をどのようにするかが問題となっているが，受講する学生の学習効果の面からも，大学の魅力あるカリキュラム作りの面からも，英語を含めた外国語の自由選択制を真剣に討議する時期に来ていると考えるのは筆者ばかりではないと思う(ちなみに，前記研究会が調査した大学生10,288名のうち，英語を必修とし，外国語1つを選択必修とするのに賛成な者3,902名（37.9%），英語を含めて外国語はすべて選択にするに賛成な者2,366名（23.0%）が上位2位を占めている)。

3. 事例(2)—上級クラス

週あたり時間数：90分×週1回
クラスサイズ　：4名（英語英文科3名，聴講生1名）
クラスの目標　：辞書を使用して新聞が読める程度の読解力とネイティヴのナチュラル・スピードのスペイン語を半分以上理解する聴解力の養成

授業内容（後掲授業時程参照）：

スペイン語上級を担当して3年目になるが，今年度はそれまでの訳読中心から大幅に内容を変更した。これまでは，スペイン史やメキシコ史の概説書，それから筆者がスペイン語で執筆した経済関係の論文などを分担して翻訳，ワープロで清書して，1冊の翻訳書作りを年間のアクティヴィティとしていたが，今年度からはアメリカで製作されたビデオ教材“ESPAÑA Y LAS AMÉRICAS”に収められている各レッスン5分程度のニュースやコマーシャル，ルポルタージュの視聴を通じて，聴解力を高めるのを第一義とした。上級は読解力の養成に最大の力点をおいているが，そのためにも，まずは学生の貧しい聴解力を高めなければならないと痛感したからである。

実際の授業は，グレゴリー・クラーク上智大学教授の提唱されている「暗号解読法」にもとづいて行なっている。この「暗号解読法」とは，カセットテープの音だけを頼りに，何を言っているのかを書き取る学習法

で，いわゆる「テープおこし」である。筆者自身もテレビ局の仕事でこのような「テープおこし」を何回か行なった経験がある。高度な語学力と根気を必要とする作業であるが，読解力を飛躍的に高めるのにきわめて有効である。

しかし，第2外国語上級程度では，直接この方法を適用するには学生の語学力に問題がある。むずかしすぎてついていけないのである。そこで，カセットテープのほか，ヒントとして内容理解の助けとなるスペイン語英訳の単語集や重要表現集を渡してある。これを毎週学生は予習宿題としてやってくる。そして授業は，宿題の添削や内容に関する質疑応答をしたり，付属テキストの練習問題をしたあと，毎回のニュースやテーマに関するディスカッションを行なっている。できればこのディスカッションもスペイン語で行ないたいのであるが，残念ながら学生にまだその力はなく，正直いって，筆者自身のスペイン語力も，完全なバイリンガルのようにディスカッションをリードできるほど高度ではない。

上級は人数も少ないので，このようなきめ細かな指導が可能であるが，学生たちの感想もおおむね好評である。聴講生として出席している年配の男性は，「文字を見ればわかるのだけれども，これほど聴解力がないとは自分でもビックリした。とても勉強になる」とはりきっている。上級は自由選択制で，意欲のある学生しか集まらないので（だから人数も少ない），このような指導が可能なのであろう。ただ，筆者としては，このような暗号解読法が今年から担当している中級クラスでも実施可能かどうか試したいと考えている。

評価方法：

上級の評価は，テストは行なわず，平常の宿題（テープおこし）と授業での発言頻度・内容をもとにしている。毎週の宿題がテスト代わりになるわけで，学生にとっては，このほうがテスト前に一夜漬けで済ませるより大変だと思う。

問題点：

たしかに，自由選択制で学生はそれなりの意欲をもって課題に取り組んではいるが，上級ともなると，その学習履歴に大きな差があり，した

がって，個々の学生のレベル差も同じクラスでいっしょに学習するのが適切かどうか，疑問になるほど大きなものとなっている。このようなレベル差の問題は，人数が少ない上級ではまだ個別に対応することで処理できるが，今年度から担当している中級では人数も多く（1クラス24人と14人の2クラス），20名以上では個別に対処するのも限界に達する。初級，中級の目標設定が，個々の担当教員によって異なり，初級で直説法現在しか勉強していない学生が何人もいる現状は早急に解決しなければならない問題であろう。ましてや，現役の学生より，仕事を引退した聴講生や主婦の学生の方が，勉強熱心で成績も良い状況は，「若者よ，バイトばかりに精を出すな」と言いたくなるほどである。

また，上級クラスでは，現在，中学や高校の英語の授業で導入されているネイティヴ・スピーカーとのペア・ティーチングや討論形式の授業を積極的に検討してしかるべきであろう。そうすれば上級クラスで筆者の念願とする「あるテーマについて相手の意見を聞き，自分の意見を述べた上で，最後に小論文にまとめることのできる，真にアカデミックなスペイン語力の養成」も可能となる。ただ，ペア・ティーチングは，事前によく打ち合わせを行ない，上手にクラスを運営する必要があるだけに，経費の面だけでなく，運営面でも非常にむずかしいことは確かである。

4. おわりに

英語ブームである。日本の英語教育産業は年間1兆円規模と言われている。これは，日本（人）の国際化指向を反映したものであろう。しかし，英語ができるようになることと国際人（国際的な視野に立って物事を考え，行動する人）になることは同義ではないし，ましてや，真の国際人を目指すならば，英語圏といったメジャーな国・文化ばかりでなく，マイナーな国や文化にも目を向けなければならないであろう。世界の語学勢力分野における「英語帝国主義」を排除する必要もあろう。

世界20ヵ国あまりの地域において1億6,000万人以上の人々が母語として使用しているスペイン語がマイナーであるかどうかは別として，日本人が英語以外にスペイン語を学ぶ意味と意義は，真の国際人に必要な

複眼的な思考と態度をもつことにあるのだと筆者は考えている。どこかのキャッチフレーズではないが，“THINK GLOBALLY. ACT LOCALLY.” こそが市民レベルでの国際化に対する基本的な視座だと考える。

このような視座にもとづき，大学における第2外国語としてのスペイン語教育に必要な改革を，「カリキュラム」それに「教える側」と「学ぶ側」の三点から考察してみよう。

制度改革としては，すでに，英語を含めた外国語の自由選択制の問題を指摘した。すべての外国語が自由選択になれば，多くの外国語教師が失業の危機に瀕するかもしれず，筆者もその危機に直面するひとりなのであるが，外国語に対する多くの学生の学習意欲のなさと多人数教育による語学教育の弊害を見るかぎり，敢えてこの自由選択制は真剣にその導入を議論しなければならない問題だと主張する。さらに，一般教養課程での語学教育の「非生産性」を改善するため，中級以上における4技能別（聞く，話す，読む，書くのどれかひとつの技能の向上に重点をおく）クラスや習熟度別のクラス編成，また，スペイン語で専門科目を教えるクラスや年間テーマを定めたゼミ形式の授業，さらにはとくに初級の場合，夏休みが間に入ると前期で学習したことを忘れてしまい，後期にはまたほとんどゼロに近い状態からやり直さなければならない傾向があることや，語学は集中して学習する方が効果的であることを考慮し，第2外国語を通年ではなく，前期または後期の集中授業形式にすることも検討すべきであろう。そして，スペイン語を使ったボランティア活動やネイティヴとの交流活動，スペイン語圏への留学，スペイン語検定資格の取得など，教室外での活動にも一定の単位を認定することによって，柔軟なカリキュラム，開かれた大学を創る必要があろう。

次に教える側の問題としては，これまでの文法・訳読（文学）至上主義から脱却し，コミュニケーション手段としてのスペイン語教育の見直しを図ることによって，これを活性化する必要がある。黙っていれば学生が来るという「殿様商売」ではなく，学生がスペイン語教育に求めているものと，自分が提供できる（提供したい）教育との接点を探り，真に魅力ある授業創りをこころがけなければならない。国語教育で著名な大村はま先生は，「静かにしなさい！」と「わかりましたか？」は教師の

禁句だという。大学教師も「最近の学生は私語が多くて困る」と嘆く前に，学生を静かにさせるだけの熱意と練りに練った授業計画案をもたなければならない。そして，研究者としてではなく，教育者としての自分を見直し，その意識を変革する必要があろう。

最後に，学生諸君には，「語学を習得するためのゴールデン・エイジと言われる幼児期を過ぎた日本人にとって，外国語が使えるようになるには，君らが想像する以上の根気と努力を必要とする。しかし，君らが憧れる“バイリンギャル”のようにただ単にペラペラしゃべれるだけでは価値はない。どのように話すかではなく，何を話すかがより重要であり，しかも内容のあることを表現できるようになるには，語学に限らず，いろいろな学習を通じて自分自身を磨く必要のある」ことを理解してもらいたい。本来，大学は最高学府として学問をする場である。しかし，多くの学生は「知的生産」よりも「痴的消費」にうつつをぬかしており，カルチャーセンターに通っている主婦の方々の方が熱心に勉強しているとは情けないではないか。もう一度なぜ勉強するのかを問い直し，鋭い分析力と豊かな創造力をもつ市民に育ってほしいと筆者は切に願っている。1年間の授業の感想として，「ぼくははじめ，地元のジュエリー売りの外人さんと友達になりたくてスペイン語をとりましたが，前期難しすぎて後悔しました。(授業を)うける気もしなくて，態度も悪かったと思いますが，先生がすごくみんなに公平で怒らず，授業をすすめて下さったのを見ていて自分が恥ずかしくなりました。スペイン語で質問されて分からない時がほとんどだったけど，それでも分かった時は，本当にうれしかったです。覚えているのは数字（を習った授業）の時などです。あと，映画の“カサブランカ”という意味も分かりました。短かったけれども本当にどうもありがとうございました。アホのぼくにも，質問をみんなと同じようにしてくれてうれしかったです」という素直な心のコメントを寄せる君らであるのだから……

授業時程

スペイン語初級・会話

目標：基本語彙1,000語程度と基本的日常会話能力の習得

順番	学習項目	時間(分)	使用教材
1	DICTADO (復習)	20	NHK スペイン語会話・水曜シリーズ
2	基本文	20	NHK スペイン語会話・水曜シリーズ
3	練習問題	20	NHK スペイン語会話・土曜シリーズ
4	会話	20	SPANISH FOR BEGINNERS
宿題	週2回　NHK テレビ・スペイン語会話の視聴		

スペイン語上級

目標：高度な聴解力と読解力の養成

順番	学習項目	時間(分)	使用教材
1	宿題の添削	20	ESPAÑA Y LAS AMÉRICAS
2	ビデオ視聴・質疑応答	20	同上
3	練習問題	20	同上
4	ディスカッション	20	同上
宿題	毎週1レッスンのテープおこし		

参考文献

大村はま『教えるということ』(1973年，共文社)
倉地暁美『対話からの異文化理解』(1992年，勁草書房)
佐々木賢『怠学の研究』(1991年，三一書房)
鈴木孝夫『閉ざされた言語・日本語の世界』(1975年，新潮社)
鈴木孝夫『武器としての言葉』(1985年，新潮社)
高島敦子『これでよいのか英語教育』(1992年，新評論)
津田幸男『英語支配の構造』(1990年，第三書館)
三浦孝『英語コミュニケーション授業の実際』(1992年，第一学習社)
若林俊輔・根岸雅史『無責任なテストが「落ちこぼれ」を作る』(1993年，大修館書店)

渡辺時夫，他『インプット理論の授業』(1988年，三省堂)
『英語教育　2月増刊号—教科書を考える』(1993年，大修館書店)
英語教育実態調査研究会『21世紀に向けての英語教育』(『英語教育』別冊，1993年，大修館書店)
サンメイトセミナー「人間の心の自然にねざした外国語教育への道」(サンメイトセミナー)
グレゴリー・クラーク（平野勇夫訳）『グレゴリー・クラーク先生の「暗号解読法」があなたの英語に奇跡をおこす』(1993年，同文書院)
アール・W・スティービック（梅田巌，他訳）『外国語の教えかた』(1986年，サイマル出版会)
Krashen, S.D. and Terrell, T.D., *The Natural Approach : Language Acquisition in the Classroom* (Prentice-Hall, 1983) (藤森和子訳『ナチュラル・アプローチのすすめ』1986年，大修館書店)
Stern, H.H., *Fundamental Concepts of Language Teaching* (Oxford University Press, 1983)
Wilkes, A., *Spanish for Beginners* (Usborne Publishing Ltd., 1987)
III Congreso de la Asociación Asiática de Hispanistas, "Programa de Ponencias" (Tokio, 1993)